

一

暑い。暑すぎる。

八月の京都は太平洋からの高気圧の所為で熱帯夜と猛暑日の毎日である。

一般的に『盆地の暑さは平地よりも穏やか』と言われているが、そんな学術的論理は我々住民の感覚からしてみれば無意味に近い。寧ろ熱が盆地に籠って、余計に暑く感じられる。人々が拳って鴨川沿いなどの水辺や洛北の奥座敷に涼を求めるのも納得である。

近年は全世界が協力して地球温暖化対策を施しているのに、嘗て程の酷暑にはなっていないものの、感覚からしてみれば焼け石に水程度の物なのである。

ただ、我々学生はそんな猛暑の中、別の敵と戦わなければならないのである。

それは期末試験である。

私の大学は基本的に七月下旬から八月上旬までが試験で、その後は夏休みでそれぞれが思い思いの活動へ

と向かっていくのである。世の学生はその夏休みを楽しく過ごしたいが為に、単位を得ようと努力するのだ。

しかし私に言わせれば、『学生の使命はまず勉強』である。遊びやサークル活動に勤しむ学生の気持ちから分らないのである。そんな事を言ったらあの人が嫌な顔をしてしまうかもしれないが。

という訳で、今の大学は誰もが試験勉強ムードに包まれている。友人や先輩に授業ノートをコピーさせてもらう者、教師の元へ赴いて媚を売る者、こんな暑い夜を徹して勉強に励む者と様々である。勿論私はこの何れにも属さないのは明白である。

さて、私はどの様にして試験の対策を行っているのか。

幸い大学には至る教室で冷房が完備されているので、試験勉強にはもってこいの環境である。しかし、同じ事を考えている人は大量に居る様で、かなりのキャパシティを誇る我が大学の図書館はごった返していた。

人ごみが苦手な私にとってこの環境は我慢がならない。よって私は学校の近所にある常連の喫茶店へ向かうのである。ここは私が入学した時から通い詰めてい

る店であり、隠れ家的な立地の為に滅多に混む事は無い。よって安心して試験対策ができる為、準備は万全なのである。

事実私はこれまで落とした単位はゼロ。『本読み羊』だの『勉強の虫』だの『宇佐見蓮子の愛人』だの有難くない称号を数多く頂いている私だが、この事だけに關しては声を大にして自負したい点である。

ただ、ここまで試験だけでやってきた訳では無い。勿論『レポート』と言う物も幾多こなしてきた。しかも、話すよりは若干拙い日本語で。

今回はそのレポートに関するお話を一つ…。

◇

試験の日程も佳境に差し掛かったある日、私はいつもの喫茶店でBGMのジャズを聴きながら、コーヒースを啜っていた。

え、試験勉強ではないのか？

ふとドアチャイムが鳴ったのでその方をみると。ドアの外から現れたのは我が相方・宇佐見蓮子であった。しかし、いつもなら時間にルーズな癖して、悪びれる素振りも無く入ってくる筈なのに、その日の蓮子は非常に怠そうな様子であった。彼女の代名詞である猫のような笑顔は全く見当たらない。それどころか髪はボサボサ、頬は痩せこけ、目の下には隈さえ見受けられ

先程も述べた通り、落とした単位はゼロである為、必要な授業を履修する必要も無く、私のスケジュールは比較的楽な物となっていた。

しかしその授業の中には期末試験を行わず、レポートの成績によって単位を認定する科目も存在する。今の私の現状は受ける必要のある試験を全て消化し、あとはレポートを作成、提出するだけなのである。

まあ、今日は試験全日程終了後によるひと時の休息と言った所か。

——カランカラン

る。とにかくそれは宇佐見蓮子とは思えない代物であった。

「はあ…」

蓮子は力なくため息をついている。

「あら、どうしたの？いつもの蓮子じゃないわね」

「ああ、メリー。私、組み方を間違えたみたい…」

蓮子は理学部所属。まだ、研究室には配属されていないものの、蓮子は我が大学が誇る『変人』・岡崎夢美教授に大層気に入られており、彼女の勧め（要求？）もあり、蓮子の時間割は驚くほど窮屈。

「それで受けるテストが多くなって、毎日睡眠不足で訳。でも、それも今日で終わり。もうダメ…」

と言って蓮子はテーブルに伏してしまった。普段は『秘封倶楽部』の活動の事ばかり考えている彼女だが、すっかりやっている事はやっているのである。

「でも蓮子はいいわね。それで全部終わったんだから」

「うん…、ってそういうメリーはまだ終わってないの？」

「試験は終わったわ。あとはレポートが一つ残ってるだけ」

「文系でレポートってのも珍しいわね。誰の授業？」

「文学部の双岩真美教授」

「ああ、あのひねくれ歴史家ね」

さすが蓮子である。全く関わる事の無いだろう人物の情報もすぐに出てくる。まあ、『鬼才が揃う』と言われている我が大学で岡崎教授と並ぶ『変人』なので知って当然かもしれないが…。

「で、どんな内容？」

「『くじで引いた時代についてまとめよ。但し、実際の時代の中心地へ行つて資料を集める事。』私が引いたのは『飛鳥時代』だったわ。」

「ラッキーだったじゃん。鎌倉とか江戸だったら大変だったわね」

「残念ながら、東日本は入ってなかった模様」

こうした実地調査を伴うからには『研究費』なる物が発生してもおかしくは無い筈である。しかし、『理の岡崎、文の双岩』と並び称されるひねくれ者。今回のレポートも気まぐれで決めたに違いない。

さらに、そうやって完成されたレポートに対する報酬がたった二単位である事には抗議せざるを得ない。

「で、いつ行くの？」

蓮子が目を輝かせて尋ねてきた。さっきまでのだらけ具合が嘘のようだ。

「はいはい、どうせ行きたいんでしょ？幸いレポートの締め切りは月末だし。私だって里帰りがあるし、今週末にでも行くつもりよ」

「さっすが。やっぱメリーは話が分かるね。じゃあ、色々よろしく。私はもう限界…」

ちよつと元氣を取り戻したかと思つたら、また空気が抜けたかの様に萎えてしまった蓮子は喫茶店を出て行ってしまった。

私はため息をつきつつコーヒーを口に含んだ。疲れているながらも自分のキヤラを忘れない蓮子が可愛かったのだ。事実彼女にはこれまで一年半、大変世話になった。これからも一心同体なのだろう。そんな事な思いを馳せつつ、店を辞そうとした。

しかし、いつの間にもやら相方は一杯注文していたらしく、私が肩代わりする羽目に。それも相方らしいなと思うと、思わず吹き出すのであった。

二

数日後の土曜日、私は京都駅にいた。遷都以降タダでさえ近代的であったターミナルが地下通路や連絡橋を通じて周りのビルを巻き込み、超巨大なターミナルを形成し、見る者を圧倒していった。

そんな中でも人がたくさん集まる所。それは勿論『首都』東京と『旧都』東京を五十三分で結ぶ超速新幹線『ヒロシゲ』が停車する地下乗り場である。ここから十数分毎に『ヒロシゲ』他が次々と東京へと発車していくのである。

これだけ頻発しているにもかかわらず、ターミナルに人が溢れるのは何故だろうと思うのは私だけだろうか。そんな事を思いつつ、人ごみを掻き分け地下ターミナルをスルーする。

地上ホーム。ここは駅の出来た当初から『日本最大級の規模』を誇っており、ここから近郊型や各種特急が引つ切り無しに発車している。